

第十一章 少年の夢

「なんてこったい。」

世の中思った通りにならぬことばかり。諦めだけが人生さ。

空手家の大山倍達は朝鮮生まれの崔永宜(さいえいぎ)という名であった。とは言え当時はあの半島も日本に併合されていたので、日本人として国のために尽くそうと苦学と努力を重ね山梨少年航空技術学校へと進み飛行機乗りを目指した。

終戦後空手家として名をはせるが、石原莞爾に心酔して病床の石原莞爾が山形県酒田での東京裁判出張法廷に出席するときに、石原を乗せたりヤカーを引いたのが大山倍達だと言われている。

少年時代から飛行機乗りを目指した杏仁華美権(あんにかびごん)は武道に勉学に邁進していた。拳法では全国で入賞するなど優れた成績を残していた。

努力を重ね海軍飛行予科練習生に合格した。海軍飛行予科練習生と言えば歌に歌われた霞ヶ浦が有名だが、関西人の杏仁は三重海軍航空隊で飛行予科練習生として訓練を受けることになった。大きいことはいいことだ。

当人はもちろん周囲や海軍からも期待された有能な訓練生だった。しかし、思わぬところに落とし穴とは、人生よくあるものだ。当人も海軍も見落としていた落とし穴は、致命的な落とし穴になってしまった。

腹が大きすぎて戦闘機のコックピットに収まらないのであった。無理に押し込むと腹がつかえて操縦桿も操作できない窮屈なありさまで、戦闘機から下りる時にも腹がつかえて難航する。

海軍としても予想していない事態であった。

予科練の七つボタンの制服は、アンニンの膨れた腹を絞めるためにボタンを二つ増やしたのが発祥と言われている。

このアンニンのありさまを三重海軍航空隊視察に来た海軍幹部が目にして、”一度乗せてしまえば下りられなくなつていいじゃん!”と思いついた男がいた。

黒島亀人と言う海軍将校だ。一般に特攻隊の生みの親は大西瀧次郎中将と言われているが、考案したのは黒島らしい。

この男、海軍内で常軌を逸脱したかなりファンキーな奇人変人だったが、発想が飛びぬけていたので山本五十六に重宝されていたと言つ。

こうして戦局が悪化すると特攻隊は生み出されていった。

零式艦上戦闘機。いわゆる「ゼロ戦」は当時世界でも突出した戦闘性能を持つ戦闘機で、特に三千キロを超える航空可能距離は突出していた。当時の戦闘機は数百キロの航続距離が精一杯の時代だった。ロンドンを空爆したドイツのメッサーシュミットなどわずか三十四キロのドーバー海峡が大きな問題で、空爆の帰りに燃料切れで海に落ちる機体も少なくなかった。

海軍がこの戦闘機の性能の要求した時、さすがの日本の設計者たちも不可能と受け入れ

がたかったが、群馬県人の堀越二郎がその要求に応じた。われらがフルカワ先生はコミケに行くので暇がなく、千葉の宵宵先生も子供たちを連れてキャンプの真つ最中だった。徹底的に軽量化に勤めたゼロ戦はアンニンの巨体が収まるコックピットを持てなかったのであった。

「アンニンはん。海は広いで大きいでえ。月が昇りまんねん日も沈みまんねん。海にお船を浮かばせて、行つて見なはれよその国。」

と飛行機乗りの夢を砕かれて配属されたのが潜水艦の搭乗員。当時世界最大の規模を誇り水中空母とまで言われたイ号 400潜水艦に配属され広島の呉に赴任した。

潜水艦の中に戦闘機三台を格納し、現在の中国でも開発できないカタパルトも装着していた。

特殊戦闘機「春嵐」はゼロ戦よりコックピットが広そうなので、もしかしたら、今度こそ飛行機乗りになれるかも？とアンニンは期待した。

しかし、魔物は何処に潜んでいるかはわからない。潜水艦の出入り口が狭く、アンニンの腹がつかえて栓をするような状態になってしまった。動けなくなつた際アンニンがもがいたため梯子から足が外れ、入り口に蓋をしたような状態で宙吊りになってしまったのだ。おまけに腹を押されたときに放屁してしまったため、密閉された艦内はガスが充満して乗組員たちは危機にさらされることとなつた。

幸い、潜水艦だったので酸素供給の装備が整つていたため、乗組員たちは隔壁を遮断して安全な場所で救出を待つことができたが、ガスへの引火の危険があるため火器は使えず、アンニン救出のために入り口をバーナーで切断することもできなかった。

港湾のクレーンで引つ張つてアンニンを救出することができたが、その際、潜水艦出入り口のハッチももぎ取られてしまい、アンニンの腹に食い込んだままの状態になってしまった。いわゆる、「腰回り浮輪の会」状態である。

海軍ではアンニンの腹に食い込んだハッチをどうやってとるか？夜を徹して議論が尽くされた。その間、アンニンは埠頭で腰かけたまま夜を過ごしていた。

「なんてこつたい。」

と、腰かけたまま思案するアンニンの姿をル・モンド誌の写真で見たオーギュスト・ロダンはブルーズ彫刻「Le Penseur (考える人)」を制作したのだった。

え？その頃すでにロダンは物故してる？そんなん黙つてりやわかりやせえへんねん。そういうことにしたつたらええねん。そういうもんや世の中なんて。

アンニンの姿に感銘を受けたのは芸術家ばかりではなかった。

背中にハッチの蓋が開いた状態で腰かけるアンニンの姿を見て、小倉から呉に来ていた大倉と言う兵隊は後に洋式便器を開発することとなる。これが東洋陶器だった。

その夜、呉の港に不審な人影がうろついていた。潜水艦に破壊活動を行おうとした共産主義者だった。

アンニンは腰かけたままの姿勢で動かずに攻め入るタイミングを見計らっていた。

幸い、共産主義者たちは月あかりに浮かぶアンニンの姿は見えていても、製作途中の彫刻かな？と思っていた。腹回りの大きさ……まだこれから削るのね？と疑いもしなかった。

「今だー！」

拳法の使い手であるアンニンが瞬時にして六人の共産主義者に襲い掛かった。騒ぎを聞きつけた見回りの兵士たちも駆けつけてきて五人は取り押さえることができた。残す一人はアンニンが投げ飛ばそうとした時に抵抗したために、アンニンの背中とハッチの蓋の間に胴体が挟まって動けなくなってしまうた。

どうやつても抜き出すことができず、県警と憲兵が来てそのままの姿勢で聴取を受けることとなった。共産主義者の男の名は菅直人と言った。長州人だと言いつ張っていたが岡山の山奥の出身らしかった。口先だけは達者のようだったが、アンニンが背中を伸ばすとハッチの蓋との隙間が狭くなり、挟まれて動けない菅は悲鳴を上げた。

翌朝、大阪から潜水夫が連れてこられた。水中に沈めることで水圧によりお腹を圧縮させてハッチから抜き出す手法が考案されたのだった。

発案者は京都から呼ばれてきた日本を代表する科学者の説博士だった。

説博士が連れてきた潜水夫は富井と言う男で、道頓堀に潜っても死なない強靱な体を持つ男だった。

説博士はアンニンの腹が水圧でハッチの蓋よりも小さくなる水深を計算で導き出した。

アンニンの背中とハッチの蓋に挟まれている菅直人のことは聞いていなかったたので、潜水用の酸素ボンベはアンニンのものしか持つてきていなかった。

菅直人は昨夜「一命をとしても革命を成し遂げる。」と言ったたので酸素ボンベなんかいらんないじゃない？と言うことに決定した。

敵もところも海に沈もうとするアンニンを見て感銘したのは徳山から手伝いに来ている黒木大尉と仁科中尉であった。初の特攻兵器人間魚雷はこの一連の事件によって発案されたこととはあまり知られていない。黒木大尉は人間魚雷「回天」訓練中に事故死してしまったが、仁科中尉は西太平洋で体当たり成功して亡くなった。

富井はアンニンに付き添って潜水し、ハッチが抜けたら潜水病にならぬようゆつくりと海上に上昇するために、アンニンの体に鉛の重りを付けた。その際、おもてなしのサービスのつもりで、泣いて命乞いする菅直人の首にも重りを巻き付けておいた。

アンニンの体から抜けたハッチが海底まで落ちないようにロープが付けられた。

いよいよ海に沈められたアンニンだったが、説博士の計算通りの水深でスリとハッチが抜け落ち、数メートル落下したところでロープによつてハッチの落下も止まった。首に重りを付けられた菅直人だけが逆さタイタニック状態で海底深くに沈んで行った。

こうして全てはめでたく解決したのであった。

「あんたそない潜るん好きやったら、潜水艦に乗りまへんか？」

と、富井はアンニンに代わりイ号潜水艦の乗組員に抜擢されることとなった。

「なんてこつたい。」

潜水艦乗務員もあきらめなければならなくなったアンニンは海軍の任を解かれた。しかし、好きだった航空機への想いは断ち切れず、当時大阪第二空港と呼ばれていた伊丹の飛行場に勤務するのだった。

アンニンが大阪に向けて列車に乗った頃、呉の港には海軍水路部の船が入ってきた。無人島に漂着した遭難者と一艘のボートを曳航していた。

海軍水路部は現在の海上保安庁の前身である。

港には連絡を受けた岡山の中岡三世料理店が回鍋肉と青椒肉絲を用意して待っていた。

曳航されるボートに乗っていたのは、鬼ヶ島に向かいながら悪霊島に流れて着いてしまった秋田のネロさんだった。ネロさんはボートの上でつぶやいた。

「なんてこつたい。」